

ハスノハギリはアジア、アフリカの熱帯あるいは亜熱帯の海岸に分布します。日本で自生の北限といわれるのは奄美大島の瀬戸内町で、沖永良部島、沖縄本島以南の南西諸島には広く分布しています。

ハスノハギリの葉は厚くて丈夫です。葉は互い違いにつき、直径は10～30cmと子供の傘になりそうなほど大きく、葉の付き方が「ハスの葉」状になることが和名の由来になっています。



ハスノハギリの葉と実

また、果実は先端に直径約1cmの穴がある総包葉に包まれます。総包葉は写真のように壺状卵形で、直径3～4cm、うすい緑色または紅色に熟します。落下した果実は水に浮くため、潮流によって散布されます。種子が大きく養分をため込んでいるため少々暗くても発芽し、成長することが可能です。

また、折角ためた種子の養分を虫に食われないように有毒なポドフィロトキシンをため込んでいます。南西諸島に住むヤシガニを食べると中毒を起こすことがありますが、その原因はヤシガニがハスノハギリの実を食べ毒をため込んだためといわれています。

樹木としては成長が早く、実際に植林してみると石垣島では30年生のもので胸高直径が55cmにもなりました。風あたりの弱いところでは高さ20mに達するまで成長するといわれています。

イイギリなどキリと名のつく植物の材は一般に軽く、水に浮き、加工もしやすいものが多いですが、このハスノハギリも軽い材で、

民俗芸能時に使うお面やカヌーなどの材に利用されています。

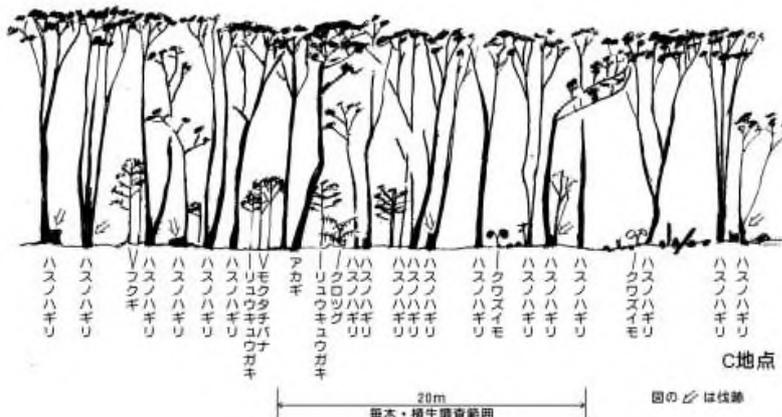
ハスノハギリは砂丘地にハスノハギリ1種が圧倒的に地表を覆うような巨木の森をつくります。というのも、砂丘地は台風時など潮風が強く当たり、また、ときに樹木にとって有毒な海水が流れ込んだりする劣悪な環境です。そこで、成長の早いハスノハギリが発芽すると、もうほかの樹木はなかなか生えることができなくなり、ハスノハギリが優占する森ができるわけです。

当博物館でもこのハスノハギリの特異性に着目し調査研究を進めてきました。沖縄県石垣島にあるもっとも規模の大きな群落を中心に調査しました。この成果が基で「平久保安良のハスノハギリ群落」は昨年国の天然記念物に指定されています。

さて、昨年11月に沖永良部島で移動博物館があった際、知名町の沖泊海岸で自然観察会を行いました。そこは白いサンゴ砂で満たされている海岸で段丘ができています。その段丘のテラス面にどっしりとハスノハギリの巨木が横たわっており、砂浜の大王のような風格が漂っていました。

ところで、ハスノハギリの自生の北限は瀬戸内町と書きましたが、実は喜界島の志戸桶集落にどういう訳か1本だけ巨木があります。人家の屋敷内に鎮座し、平成14年には喜界町の天然記念物にも指定されています。その近くには津波のとき打ち上げられたとか、山から崩れ落ちてきたたとかいわれる大きなサンゴ礁の岩もあり、自然の不思議を感じさせる場所です。

鹿児島は熱帯性の植物の北限地となっている場所が多数あります。なぜ植物がそこを北限としているのかなど考えてみると興味が尽きないものです。



石垣島安良浜ハスノハギリ林の林内構造



沖永良部島のハスノハギリ